

意見書

大正十年一月

東京市長

後藤男爵閣下

侍曹

都市衛生二部塵埃及屎尿ノ處分處理方法ニ付キ愚見
ヲ叙説シテ閣下ノ御覽ニ供ス。其叙説スル所多クハ小生
が明治四十年以降特ニ東京市ノ為ニ自ラ實驗又調査
シタル事蹟ニ關ス。今ヤ大都市計畫實施ノ際ニ当リ幸
ニ東京市汚物處理ノ方針ヲ確定シ都市衛生ノ進步改
善ヲナスノ一階梯トナルヲ得ハ本懷也

大正十年一月

町井正路

東京市長

後藤男爵閣下

侍曹

劉新田鑒上

田中

東京市、明治維新の初め、
 江戸時代から続く町割を
 基本とし、市制を敷いた。

東京市汚物處理事業就テ

緒言

都市ハ個ノ有機体ニシテ常時食物ヲ摂取シ排泄物ヲ排出セリ、
其排泄物ノ主要ナルモノヲ塵芥ト屎尿トス、汚物處理ノ事ハ
市ノ衛生上最モ重要ナル事項ニ属シ速ニ解決セザルベカラザル
緊急要務タルナリ

汚物處理事業ハモテ歐米ノ大都市ニ付テ見ルニベリーン市ニ
於ケル屎尿砂丘灌溉法ノ如キパリ市ノ屎尿濾過乾糞製
造法ノ如キロンドン市ノ屎尿消毒沈澱放流法ノ如キシカゴ市
ニ於ケル塵芥分別處理法ノ如キ學ビ放フニ足ルモノヲシト昆モ彼我
沿革ヲ異ニスルノミナラズ經濟關係モ亦考慮スルヲ要スルガ故ニ歐
米ノ都市ニ於テ成功シタル方法ト昆モ直ニシテ我邦ニ適用スベカラズ

特講究シテ東京市ノ現在及将来ニ適應スル方策ヲ樹立実行スルヲ必要トス

東京市ノ汚物掃除現況

屎尿即下肥ハ我邦農業ニ欠クベカラサル良肥料タルガ故ニ之が汲取掃除ハ農家ニ依頼スルヲ最善ノ策トナスモ東京市ハ最近異状ナル發展ヲ遂ゲ接續町村モ亦同時ニ膨脹シタレバ排泄スル屎尿量ト關係農地トハ逆比例スルニ至リ屎尿ハ市ノ各所ニ停滯氾濫シ農家又ハ汲取商人ハ肥料代金ヲ支拂ヲナサザルノミナラズ反對ニ市民ヨリ汲取料金ヲ請求スルニ至リタリ。市民ハ最初一定料金ヲ支拂ヒ一時的ノ安定ヲ得タルノミテ料金ハ漸次騰貴シ停滯ハ依然旧ノ如クナルヲ見出シタリ。其原因ハ農家ノ怠慢又ハ貪慾ヨリ来リタルニ非ズ屎尿ノ過剰量ヲ除去セザル限り之が改善ハ期待スベカラザルナリ。如何ニモ此過剰量ヲ除去スルヲ得ベキヤ各方面ヨリ研究ヲ進メセテ綜合シテ満全ナル計畫ヲ樹テザルベカラズ

塵芥ニ付キテハ明治三十三年汚物掃除法發布セラレテヨリ東京市自ラ處分ヲナスニ至リ無價物トシテ搬出ヲ実行シ来リ所謂陸上運搬ヲ完成シタルモ未ダ處理計畫ニ着手セズ一半ヲ放任スル状態ニアリ

塵芥焼却ノ不合理ナ事

東京市が年間ニ排出スル塵芥ハ億萬貫ニシテ其全價值ヲ發揮セシムル時ハ屯百萬円ノ現金ニ代フルヲ得ベシトモ之ヲ焼却スレバ其價值アル物料ヲ盡ク煙ト灰トニ化シ去ルノミナラズ之ニ要スル設備費ト經常費トヲ費シ何算得ル処ナキナリ。燐酸ト加里トハ灰中ニ残留スルトモ其大部分ハ不溶解性ニシテ用ヲナサズ窒素ト

有機物トハ雲散霧消シテ影ヲダモ止メズ誠ニ不合理ニシテ不経済
極マル無益ノ業ト云フベシ

水管式汽罐ノ製造家バゴックウィルソク會社ハ塵芥ヲ燃料トスル汽罐ヲ
提供シ説ヲナレテ曰ク「都市ノ塵芥百貫中八十貫ハ有機物ニシテ其
熱量ハ計算上及実験上二千カロリー以上ニ達スル故ニ二磅ノ塵芥
ハ二磅ノ水ヲ蒸発スルヲ得ベシト余ハ此説ヲ信ズル能ハズ、塵芥ヲ煖
却場ニ運搬シ来リタル際ハ少クトモ其三割ハ既ニ腐敗シ不燃性ト
化シ居ルノミナラズ腐敗物ハ他ニ附着シテ燃焼ヲ妨グルヲ以テ先ツ總
熱量ノ半ヲ引キ去ラザルベカラズ而テ又塵芥ノ水分ハ常ニ三〇％
以上ナルヲ以テセテ百％以下ニ乾燥スルニ非ザレバ熱ヲ利用スル程度ニ
煖ヘ得ルニ至ラズ此間多大ノ熱量ヲ消耗シ結局有効ニ利用シ得ル
モノハ全熱量ノ四分ノ一タルニ過ギズ、又其四分ノ一ヲ有効ナラシムル為

メニ複雑ナル手續ヲ要スベケレバ一磅ノ塵芥ヲ以テ四分ノ一磅ノ水ヲ蒸
発スル事ハ容易ノ業ニハ非ザルベシ

風車ヲ利用シテ塵芥ヲ煖棄スル方法ハ遲滞ナク連續煖却セシ
ムル方法トシテハ最も佳ナルカ如クナルモ撰別モ行ハズ乾燥モセザル塵芥ヲ煖
クハ風車ヲ用ヒル事ニ依リテ行程ヲ増進スルモノニ非ザル事ハ大阪市
ニ於テ大正式煖却装置ナルモノヲ採用シテ知り得タル事實ナリ

塵芥ヲ乾留シテ醋酸、アルコール、アンモニア、タール等ノ乾留産物
ヲ採ル方法ハ最近ノ科學ヲ應用シ著シク進歩シタルモノハ如ク思ハル、
モ果シテ有利ニ行ヒ得ルヤ否ヤ疑問ニ属セリ、塵芥ノ如ク容積過大
ニシテ成分過少ナル物質ヲ乾留シテ有利ナル結果ヲ見ント欲スルハ暴挙
ノ誹ヲ免レザルベシ、容積大ナル爐數從テ多ク計算以外^熱燃料
ヲ要シ遂ニ不結果ニ終ルベシ、大阪市ニテハ十萬四ヲ投ジテ試験工場

ヲ建設シ塵芥ノ乾溜及熱ノ利用ヲ行ハントナシツ、アルモ恐クハ豫期ノ効果ヲ見ル能ハザルヘシ

東京市ノ塵芥排出量

前ノ助役故宮川鉄太郎氏が大正三年十月時ノ市長阪谷男ニナシタル報告書中ニ市ノ塵芥年額總量ヲ六千六百二萬千九百九十五貫トセリ此數ハ掃除人夫ノ搬出回数ニ七十貫ヲ乘ジテ得タルモノナリ、東京市ニテハ塵芥手車一台ヲ七十貫馬車ヲ三百五十貫ト假定セルモ横浜市ニ於テ滿二十年間精密ナル秤量試験ノ結果手車一台ハ平均百貫ナルヲ知ルヲ得タルヲ以テ百貫ヲ集ズレバ九千萬貫ミシテ其後ノ増加數ヲ加算スル時ハ現在ノ東京市ハ一年一億萬貫以上ノ塵芥ヲ排出スル事ヲ知ルヲ得ベシ

塵芥中ニ含有スル物料ノ分別調査

前ノ市會議員日本橋區撰出故石川甚作氏、千葉縣津田沼町ノ伊藤祿一氏ノ援助ヲ得テ余ハ大正四年以降東京市ノ塵芥付キ山手、下町、津田沼等數ヶ所ニ於テ春夏秋冬ノ四期ニ涉リ塵芥ノ含有物ヲ分別秤量シ合セテ腐敗ノ程度ニ付キ調査スルヲ得タリ、左ニ其分別品目及含有平均量ヲ表示ス

撰別品名

含有百分率

藁、落葉、蔬菜屑、果皮、腐肉

七〇・〇〇％

紙屑

二〇％

檻樓

六〇％

骨片

二〇％

介殼

一八〇％

硝子屑

八〇％

瀬戸物屑

九。%

金屬類

七。"

木片、木炭、俵、ダンペラ、果心

二・五〇。"

礫(砂利)、瓦片

八・三〇。"

土砂

一三・七〇。"

石炭、骸炭、木炭

三〇。"

以上

塵芥、肥料の價值

東京市ノ塵芥一々年ノ排出量ハ一億萬貫ニシテ其内肥料芥ト称スルモノ即藁、蔬菜屑、腐肉、果皮、落葉等ハ無量七千萬貫ヲ占ム今其三要肥料分ヲ最底ニ見積リテ百貫中ニ窒素六百匁、燐酸三百匁、加里五百匁ヲ含ムモノトシセテ欧州戦乱前ノ相場ニテ窒素

百匁三十錢、燐酸百匁六錢、加里百匁十錢トセバ塵芥中ノ肥料芥百貫ハ二四十八錢ノ價值アルモノトス。所謂向地ト呼ブ千葉縣ノ一部ニ於テ現今肥料芥百貫ニ付キ二四二十錢以上ニテ農家ニ供給セラレリアリ。七千萬貫ノ肥料芥中ニハ二千八百萬貫ノ有機物ヲ含有シ此有機物ノミテ其價值ハ千四百萬貫ノ米糠ニ匹敵セリ

晩近科學ノ進歩ニ隨ヒ幾多ノ新化学肥料ノ發明セラル、アリ生産上ノ欠点ヲ補ヒ得タルガ如クナルモノ等ノ化学製品ハ有機物ヲ配劑スルニ非ザレバ満全ナル效果ヲ現ハサル事實ニ鑑ミテ肥料芥即塵芥貴重ナルヲ知ルベシ

千葉縣下ニ於ケル塵芥消費ノ概況

東京市及横浜市ノ塵芥中ノ肥料芥之ヲ千葉縣下ニ於テ堆積肥料トシテ使用スル事ハ過去三百年ノ古キ歴史ヲ有シ西市ノ膨張ト共ニ其

施用區域モ亦廣大シ現今ハ千葉町、幕張町、検見川町、船橋町、津田沼町、大和田町、行徳町、葛飾村、豊富村、睦村等十ヶ町村ニ及ベリ。之等町村ノ土壤ハ何レモ有機物ニ乏シキ砂質土ニシテ塵芥堆積肥料ヲ使用スルニ非ザレバ作物ヲ栽培スルモ平年作ニ相当スル收穫ヲ納ム能ハサルナリ。該地方農家ハ朝塵芥ヲ失フノ厄ニ會スルガ如キ事アラバ農業上大恐慌ヲ惹起スルニ至ルベシ。

千葉縣下ニ於ケル肥料芥賣買ノ状況

東京市ノ塵芥取扱場ハ目下約四十ヶ所アリ、之ハ撰別場トシテ設ケラレタルモノニ非ザルモ此所ニテ肥料トナルベキ部分即肥料芥ヲ撰別シテ船積ス。此際便宜有價物ヲ拾取ルノ習慣ナレバ衛生上甚不都合ナリ。船積シタル肥料芥ハ途中海水ヲ注ギテ醗酵セシメ船橋、津田沼等ノ海岸ニ於テ一荷(十五貫)ヲ二十錢ヨリ二十六錢ノ割合ニテ農家ニ

賣渡セリ。農家ニ之ヲ海岸ニ堆積シ置キ十荷ニ付キ二十錢ノ撰別費ヲ支拂ヒ堆積原料ノミヲ農地ニ運搬使用ス。一荷十五貫中堆積肥料ハ十三貫六百目ナルヲ以テ其價格二十四錢(肥料芥一荷二十三錢撰別費二荷二錢)ニ割合ル時ハ一貫目一錢七厘六毛ノ割合ナリ。撰出シタル一貫四百匁ハ硝子屑、瀨戸屑、木炭、石炭、骸炭、果心等ニシテ撰別者ノ所得ナリ。故ニ東京市一億萬貫ノ塵芥中七千萬貫ノ肥料芥ハ一貫一錢七厘六毛替トシテ百二十三萬二千円ノ賣上トナル勘定ナリ。

肥料芥利用ニ關スル豫想

從來ハ浦安ヨリ千葉ニ至ル一帶海岸ニ点々不規律ニ東京横浜ノ塵芥ヲ堆積シテ取引ヲ行ヒツ、アルヲ以テ土地ノ風致ヲ害シ海水ヲ汚染シ堆積醗酵ノ臭氣ヲ飛散シ加フルニ病毒傳播ノ恐アル等衛生上不都合ナル事多キヲ以テ此地方海岸ノ住民ハ海水浴其他四季ノ散策

ニ都人士ヲ招誘シ地方發展ヲ希望シツ、アルヲ以テ常ニ塵芥ヲ排
斥シ事アル毎塵芥ノ陸揚場ヲ減減セシムルニ強メ肥料芥ノ發達
ハ自ラ阻害サレツアル現況ナリ、大正六年ニ調査シタル際ニハ肥料芥
運搬ニ從事スル船ハ百ニテ六艘ニシテ其平均積載量十五噸、一年平
均航海回数六十回ナレバ一年ノ總運搬量ハ三千萬貫以上ナリ、塵
芥ノ量ニテハ五千萬貫ニ相当セリ、其後漸ク減少シ今日ニテハ約
八十艘ヲ残スノミナリ、大正六年ニ調査シタル際ニハ肥料芥一荷ヲ十錢
ノ割合ニテ農家ニ給シ撰別費ハ荷九厘ナリ、故堆積肥料一貫ハ八
厘ニ当リシガ今日ニテハ前述ノ如ク一錢七厘六毛ヨリ一錢九厘ニ騰貴シ
タルヲ以テ農家ノ經濟上使用量ノ漸減ハ当然ノ事ナリ、
右ノ狀況ヲ見テ十縣下ニ於ケル肥料芥ノ施用ハ衰減ニ歸スルモノト断定
スルハ同情ナキ皮相ノ見解ナリ、汚物處理ニ關シ健全ナル計畫ヲ

樹シト欲セバ沿革ヲ尊重シ自己特有ノ立場ヲ利用發展セシメザルベ
カラズ、手賀沼ヨリ海岸ニ至ル前記十ヶ町村ノ農地ハ優ニ億萬
貫ノ肥料芥ヲ消費スルヲ得ルヲ以テ適當ナル方法ヲ講ジ一舉ニシテ
東京市汚物處理多年ノ宿題ヲ解決シ千葉縣農民救済策
ヲ樹立スベキナリ

東京市ノ塵芥ニ適用スベキ合理的ノ處理法

浦安ヨリ千葉ニ至ル海岸ノ中央ニ位スル津田沼町ノ荒廢シタル
塩田ヲ利用シテ一大塵芥處理工場ヲ設置スベシ、市内ニテ塵芥ヲ
撰別スル事ヲ禁ジ取扱場ニ塵芥ヲ留置セシメズ車ヨリ直ニ船ニ
積ミハレ引船ニテ迅速ニ處理工場ニ運搬スルナリ、

工場ニテハ水ニ土砂ト砂利トヲ機械的ニ分別シ次ニ四筒型乾
燥機ヲ通過セシメ醃酵ヲ起ササル程度ニ乾燥シ次ニ移動

撰別台ニ移レテ有價物ノ分別ヲ行ヒ残ノ乾燥堆肥原料
ハ納屋ニ送り漸次農家ニ引渡スモノトス
從來ハ東京ヨリ船槁附近ニ至ル航海ノ途上肥料芥ニ海水ヲ注ギ
盛ニ醗酵セシムヲ以テ陸揚後附近ヨリ苦情起ルハ当然ノ事ナリ
又露地堆肥ナレバ風雨ニ晒サレテ有効成分ヲ流失スルヲ以テ品質甚
劣算ナルヲ免ルニ能ハザルナリ、一ヶ所ニテ處理スルヲ以テ海岸ヲ汚
染ス直ニ乾燥シテ醗酵セシメザルガ故ニ臭氣ヲ発散セズ地方人ヨ
リ嫌惡サシム塵芥ハ反對ニ大ニ歡迎セラレ地方ヲ富マシムル物料
トシテ尊重サルニ至ルベシ、肥料芥ハ乾燥シテ貯藏可能トナリ
運搬ニ便利トナリ成分ノ流亡スル憂ナク大ニ需要ヲ喚起シ給供
不足ノ好況ヲ呈スルニ至ルベシ
乾燥用燃料ハ塵芥ヨリ分別シタル可燃物ヲ用ユ、又乾燥ト同時ニ簡

單ナル方法ニテアルデハイド消毒ヲ行フヲ以テ病毒傳染ノ憂ナ
シ、肥料芥ヲ乾燥スル時ハ著ク重量ヲ減ズルヲ以テ賣上勘定ニ
違算ヲ生ズルガ如ク思ハルモ容積ニ依テ取引スル習慣ナレバ
反テ賣上ヲ増加スル傾向アルモノトス、現在ノ加水醗酵シタル肥料
芥ノ立坪ハ約十貫ミシテ乾燥シタルモノハ六百貫位ナリ、乾燥
肥料芥ハ大部分ハ工場ニテ農家ニ引渡スモノナルモ販路ノ關係上適
当ナルヶ所ニ納屋ヲ分設シ運搬貯藏スルモノトス、又之ヲ壓搾シ
テ貨車、船便ニ依リ他地方ニ供給スルヲ得ベシ
移動分別台上ニ於ケル有價物ノ分別ハ機械カト人カトヲ兼用スル
モノシテ一億萬貫ノ塵芥中一十萬貫ノ有價物即一日ノ行程トシテ
約三萬貫ヲ撰出スルニ三百人女エヲ要スルモノトシ年額延人員十
萬人平均支給一四トシテ十萬圓ヲ支拂ヒ撰別物ハ最底十五萬

四以上ニ賣却スルヲ得ベク動力費等ヲ加算シテ収支相償フ範圍ニ於テ分別ヲ行フヲ得ベシ

一億萬貫ノ塵芥中七千萬貫ノ肥料芥ニ妥善ニ見テ六千萬貫トスルモ一貫一錢トシテ六十萬圓ヲ得ベク全支出ヲ仕拂ヒ純益金ヲ擧グルヲ得ベシ

本計畫ハ經濟ノ基礎ヲ肥料芥ノ販賣ニ置クヲ以テ農家が結束シテ不買同盟ヲナシ計畫ノ根本ヲ破ルガ如キ事ナキヤヲ恐ル、者アリトセバ塵芥消費地事情暗キ為メニシテ無用ノ杞憂ナリ市自ラ本計畫ヲ遂行シ利益ヲ主眼トセズ損失ヲ起サザル程及ニ妥價ニ供給セバ不買同盟ヲ夢見ル者ダモナカルベク廢物利用事業トシテヨリモ興農政策トシテ謳歌セラル、ニ至ルベシ

農家トノ間ニ豫メ引受數量ヲ契約スルヲ得ルガ故ニ前金ヲ徴収

スルト同様確實ニシテ萬々五邊^豫生ズガ如キ事ナシ

撰別物ノ利用

本事業ハ一年一億萬貫トナリ莫大ナル塵芥ヲ遲滞ナク處理スル事ヲ主眼トナスヲ以テ撰別シタル紙屑以下十數種ノ物料ハ更ニ手ヲ加ヘ又ハ加エスル事ヲナサズ其マ拂下ゲ肥料芥ハ堆肥ノ原料トシテ農家ニ引渡ス迄ノ業務ヲ處理スルモノナリ、工場ヨリ排出スル土砂ハ年額五千乃至八千五坪ヲ排出スルヲ以テ毎旦ヲ埋立ル時ハ十年後ニハ廣莫タル地積ヲ出現セシメ得ベシ、又此土砂ハ特ニ多量ノ肥料分ヲ吸收シ居ルヲ以テ畑地ノ表土トシテ或ハ園藝用土壤トシテ販賣スルヲ得ベシ、塵芥ヨリ撰出シタル藁現在促成農業資料ニ供セリ、又製紙用原料トナスヲ得ベシ、木片、木炭、石炭、廢炭等ハ工場ノ乾燥用及動力用燃料ニ供ス、肥料芥ニ部ヲ割キテ養豚ヲ行フ事

モ亦可能ナリ。密柑類ノ皮ヲ撰別シテ橙皮油ヲ製造スル事モ可能ナリ。介殼ヲ以テ石灰ヲ製造スル事瀨戸屑ヲ粉碎シテ耐火粘土未ヲ製造スル事ハ最も簡單ニシテ有利ナル仕事ナリ。其他紙屑、ボロ布、硝子屑、金物等ヲ適當ニ利用セバ大ニ利益ヲ増進セラルヲ得ベシ

處理工場敷地撰擇准

汚物處分ヲ行フ場合ニ其方法ノ如何ナル形式ナルヲ問ハズ敷地ノ撰擇ヲ以テ一大难事トナス。東京市ハ先年塵芥焼却ノ計畫ヲ樹テ最初綾瀬川沿岸ニ敷地ヲ撰定シタルモ附近ノ反對及河川改修等ノ為ニ用ユル能ハズ次ニ東京渡口台場ノ内ニテ所ヲ陸軍省ヨリ拂下ゲ焼却場ヲ建設セントシタルニ宮内省側ヨリ反對ノ声ヲ聞クニ至リ遂ニ実行スル能ハズシテ今日ニ及ビタリ。此点ニ付キテハ

獨リ東京市ノミナラズ各都市トモ撰擇難ニ對シ苦キ経験ヲ味ヒツニアリ。處理方法ノ形式上何レノ場所ニテ行フモ支障ナキ場合ニモ東京市ノ附近周圍適當ナル所ニ敷地ヲ見出ス事ハ甚ダ困難ナリ。

肥料芥ヲ眼目トシテ塵芥處理ヲ行ヒト欲セバ地勢上船橋町又ハ津田沼町ノ海辺ニ敷地ヲ求メザルベカラズ。船橋町ノ海辺ハ船ノ通路浅ク十噸積以上ノ船ヲ入ルニ便ナラズ又船橋町ハ習野ニ於ケル軍隊ノ物資供給地タリ又將來東京市民ノ住宅地タラシムル希望アルヲ以テ塵芥屎尿等ヲ處理スル場所トシテハ適當ナラズ。津田沼町ハ船橋町ヲ去ル事約一里ニシテ海辺ノ航路深ク二十噸積ノ船ヲ航行シ得バク肥料芥需要ノ中心地ニシテ敷地撰擇ノ好適地ナリ。津田沼町ニハ谷津、久々田、鷺沼ノ三大字アリ何レモ海岸ヲ有シ一見撰擇ノ自由ヲ表明スルガ如キモ久々田及鷺沼ハ海浜ニ近ク縣道アリ加フルニ滞ノ

漁業地ナルヲ以テ廣大ナル工場敷地ヲ得ル能ハズ之ニ反シ谷津ノ海
田縣道ヲ去ル事遠ク且ツ漁場少ク荒廢セル塩田ノミナレバ敷地ヲ
得ル事容易タルベシ此地域ハ地下水豊富ニシテ井戸ヨリ良水ノ噴出
スルヲ以テ工場トシテハ此上ナキ便利ノ地ナリ

塵芥處理ノ敷地ヲ撰擇スル事既ニ右ノ如ク困難ナル以上ハ屎尿處理
ヲ見出ス事ハ一層難澁ナルハ自ラ明ナリ荒川沿岸尾久村ニ尿ヲ處
理スル工場アルヲ以テ之ヲ利用セバ至極便利ナルガ如ク思ハルモ屎尿混
合物ヲ處理スルニ便ナラズ完全ナル脱臭裝置ヲ用ユルモ洗滌汚水・蒸餾
残渣ノ濾過等技術上面倒ナル事項多ク安心シテ處理ノ操作ニ
從スル能ハズ塵芥處理工場ヲ津田沼ニ建設シタル場合ハ同一ノ場所ニ
屎尿處理ヲ行フヲ得ル便利アリ運賃ノ増加ハ工費ノ底減ト相殺
スレバ經濟上兩地異ル事ナク遠キ方ニ得ル事多キヲ知ルベシ

運搬用船舶及工場建築物

塵芥船ノ數ヲ百三十艘トシ三隊ニ分ケ一隊ハ取扱場ニテ船積シ
セ二隊ハ途中ヲ航行シセ三隊ハ處理工場ニテ陸揚シワアルガ如ク
運用ス取扱場ヨリ引船起點月島附近ニ至ル間ハ一艘三人ノ舟
夫ヲ用ヒ汽船ニテ引船中ハ五艘乃至十艘ニ人ノ船夫ヲ置ク運
用汽船ハ二艘トシ一回ニ十艘ノ塵芥船ヲ引キテ一日二回往復ス汽船
現行員ハ運轉手一名火夫一名即運轉手三人火夫六人汽船什
舟夫八人塵芥舟夫四十人等ノ給金・船舶用石炭及作事修繕ノ
費用ヲ十三萬四千トシ運搬量ヲ一億萬貫トスレバ一貫ニ付キ一厘三毛
ニ当レリ七千萬貫トスレバ一貫ニ付キ一厘九毛弱ニ當レリ假ニ費用
合計二十萬四千トシ登リ運搬費ヲ七千萬貫ナリトスルモ一貫ニ付キ
三厘弱ニテ足レリ

處理工場、建物ハ撰別工場、分別有價物置場、乾燥肥料、
置場、汽罐、汽機室、事務所等ニシテ、此内多數ノ立坪ヲ要
スルハ乾燥肥料、置場ニシテ一坪ニ二千五百貫、追置キ得ルモノト
假定シ、日分ハ約八十坪ヲ要スベク、ヶ月分ノ置場ヲ準備スルニ、二千
四百坪ノ置場ヲ要スベシ

塵芥處理收支概算

收入ノ部

一、肥料芥（乾燥シタルモノ）五千六百萬貫

一貫目
五美替

五六〇〇〇〇・四

一億萬貫ノ塵芥ヨリ排出スル肥料芥ハ七千万貫タルベキ筈ナルモ、其八割ヲ算上ス
乾燥後ハ立坪ヲ單位トスル必要アルモ、結果同一ナル故便宜乾燥前ノ貫數ヲ用ユ

二、紙屑類

十萬貫

一貫目
八美替

八〇〇〇・四

紙屑ノ含有歩合ハ十分ニシテ一億萬貫中二十萬貫ナルベキ筈ナルモ、五割ヲ計上ス

三、布片・襤褸

三十萬貫

一貫目
四十美替

一二〇〇〇〇・四

襤褸ノ含有歩合ハ十分ノ六ニシテ一億萬貫中六十万貫ヲ得ベキモ、其
半量ヲ計上ス、襤褸ハ回轉式ノ洗濯機ニテ處理セラレ清潔ナルウイス
トシテ販賣セラル

四、骨片

加工品
骨粉トシテ

二萬貫

一貫目
七十美替

一七〇〇〇・四

骨片ノ含有歩合ハ十分ノ二ナルヲ以テ二十萬貫ヲ得ル筈ナルモ、實作業
ニ於テハ小ナル骨片ヲ撰出スル事ハ困難ナルヲ以テ十分ノ一ガクヲ集メ得ル
モノト假定シ、二萬貫ヲ計上ス、骨片ハ簡單ニ蒸壓シテ更ニ粉砕シ骨
粉肥料トシテ販賣ス

五、介殼

石灰トシテ

一貫目
五美替

二二五〇〇・四

介殼ノ含有歩合ハ十分ノ八ニシテ一億萬貫中八百萬貫ヲ含有スル割合
ナルモ、其四分ノ一ヲ計上ス、介殼ハ更ニ之ヲ煖キテ石灰トシテ販賣ス

六. 硝子屑

十萬貫

一貫目
十美替

一〇〇〇〇・四

硝子屑ノ含有歩合ハ千分ノ八ニシテ一億萬貫中ニハ八十万貫ヲ含有セリ。本豫算ニ其八分ノ一ヲ計上ス。硝子屑ハ施肥ノ際危險ナルガ故ニ撰別ニ強ルヲ以テ実作業ニ於テ数量増加スベシ

七. 瀬戸物屑

七十三萬貫

粉未トシテ
一貫五美入替

三六〇〇〇・四

瀬戸屑ハ含有歩合千分ノ九ニシテ一億萬貫中九十萬貫ナレドモ其八割ヲ計上ス。尤ハ更ニ粉末トナシ耐火粘土未トシテ販賣ス

八. 金物類

三十五萬貫

一貫目
十美替

三五〇〇〇・四

金物類ノ含有歩合ハ千分ノ七ニシテ一億萬貫中七十万貫ヲ含有スルモ其半量ヲ計上ス。金物類中多クハ鉄類ナルヲ以テ磁力ニ依テ簡單ニ分別ス

九. 砂利(礫)

二千二百四十五坪

一立坪
三美替

四四八〇〇・四

塵芥中ノ小石ハ傾斜板ニ依テ撰別シ更ニ竹篩過シテ大小ヲ分別ス。其含有歩合ハ千分ノ八十三ニシテ一億萬貫中八百三十萬貫ニシテ二千八百立坪ニ相当ス

水
状入合計 金八十五萬三千三百四也

以上ノ外木片・アソベ・俵類ノ如キ可燃物ハ計算上二百五十萬貫ヲ得ベキ筈ニシテ工場操作上乾燥用及動力用燃料ニ供シテ残リアルガ如キモ動力用ニ別ニ石炭ヲ購入使用スル事トス。ハ。木炭・石炭・骸炭ノ分別シ得タルモノハ動力用ニ使用ス。土砂約一萬立坪ハ敷地内ノ埋立用ニ使用ス

支出ノ部

汽船運轉手

三人

月額百二十四

四三二〇・四

汽船火夫

六人

六十

四三二〇・

汽船什舟夫	八人	月額六十四	五七六〇円
塵芥船夫	四十人	月額六十四	二八八〇〇円
女工	二百五十人	一日四	九〇〇〇〇
男工	五十人	一日四	三六〇〇〇
機械工	五人	一日三四	五四〇〇
技術員	六人	平均月額百五十円	一〇八〇〇
汽船用石炭	二八八〇吨	二十五円替	七二〇〇〇
動力用石炭	四〇〇〇吨	二十五円替	一〇〇〇〇〇
工場消耗品費			一〇〇〇〇〇
船舶作事費及機械建物修繕費			一〇〇〇〇〇
營業總掛費			六〇〇〇〇〇
支出合計	金四拾三萬七千四百円也		

差引益金四十萬五千九百円也
此数字、實際の場合、尙才底減スベキモ本目論見が有利ニ遂行
レ得ル事ハ疑フヘカラズ

塵芥處理工場設備費及船舶購入費概算

金十五萬円也 土地費

金五萬円 荒廢塩田買収費 約三萬五千元

金五萬円 埋立費 約一萬千元

金五萬円 護岸工事費

金十九萬九千円也 建物費

金三萬円 撰別工場 三百坪 坪百円

金十五萬円 乾燥肥料放置場三千坪 坪五十円

金五千円 汽罐、汽機室及鍛冶場等坪 坪百円

金六千四

事務室及試驗室四十坪 坪百五十

金八千四

分別物加工場百坪 坪八十四

金十六萬四也

船舶費

金十三萬四

塵芥船百三十艘

金三萬四

汽船三艘

金二十萬四也

機械費

汽罐ランカッレヤ型至七尺長三寸尺常備氣壓百磅一台

未口三尺高七十尺ノ煙突 一基

汽機八十馬力 一台

エレベーター 十組

運搬車三十台及軌道材料 五百間

唧筒 五台及鉄管銅管鉛管石各各種一

篩機 五台

砂利分別裝置一式

移動攪別臺 五組

檻樓洗濯機 一台

蒸壓器及粉碎機各一台

石灰燒製裝置一式

瀬戸屑粉碎機 一台

乾燥機至七尺長百尺 二台

以上諸機械裝置基礎工事費 据付費共

金四萬一千四也

工事豫備費

合計金七十五萬四也

尿尿の停滞と應急汲取

東京市は尿尿の停滞に對する應急策として申込者より荷付金二十五銭を徴収して救助汲取を行はうとあり、之は止むを得ざるに於て之を行はうとして其效果比較的は僅少なるとは云ふが幾多の矛盾と弊害とを胚胎セルヲ以テ速に根本的の計畫を着手スルヲ要ス、然レドモ此の應急汲取は市營処分實施の前提として必要ナル事項ナリ、今日ノ如キ停滞維ハ其原因が永久的にして其処分權を個人ヨリ市に移スニ非ザレバ適宜ナル解決ヲ見ル能ハズ應急汲取ハ即此權利を移轉ニ對スル立證者タレバナリ

尿尿の市營処分として實施すべき方法

凡ソ大都市ヨリ排出スル尿尿ヲ處分スルニ就キテハ大畧三方法アリ、一、欧米ノ大都市ニ倣ヒ大下水装置中ニ下水ニ結合セシメ沈澱消毒

等ノ手續ヲ經テ海洋ニ放流スルモノ、又ニ都市ニ接續スルカ若シクハ交通ノ便アル郡部ノ農民ニ汲^取掃除ヲ委任スルモノ、又ニ化学的ノ處ニ依リ乾糞肥料、煤炭肥料等ヲ製造スルモノ及ビ硫酸アンモニアヲ製造スルモノ也ナリ

屎尿ノ放流ヲ行フニ市街家屋ノ構造ガ洋式タルヲ要スルガ故ニ近キ将来ニハ行ヒ難カルベシ。假ニ日本式家屋ニ流洗便所ヲ應用スルモノトシテ放流ヲ實行スルニハ大ナル水源若クハ壓出裝置、地中埋設管、濾過又ハ沈澱消毒裝置等ヲ設備スルニ數億圓ノ資金ヲ要スルヲ以テ市ノ財政多端ナル今日之ガ實行ハ難カルベシ。假ニ財政ニ餘裕アリテ之ヲ遂行シ得ルモノトスルモ東京淺ノ如キ内海ニ放流スルハ良策ト云フベカラズ、ロンドン市ハ用意周到ナル放流式ヲ採用スルモノナルモ、ティムス河ハ漸ク其汚染度ヲ増加シ魚類ハ棲息スル能ハサルニ至レリト云フ。又サレ

フランシスコ市ニ於テハ潮流ノ逆行シタル際港内ニ放流物ノ流込ミタル事アリ。放流式ガ必ズシモ倣フベキモノナリト云フベカラズ、ベルリン市ニ於テハ郊外適當ノ位置ニ位スル大砂丘ノ頂上ニ屎尿池ヲ設ケ市中ヨリ此池ニ壓出シタル放流物ヲ砂丘ノ表面ニ循環的ニ灌漑シテ作物ヲ栽培セリ。東京市ノ附近ニハ之ニ倣フベキ砂丘ナキヲ遺憾トス。下肥即屎尿ハ我邦農業ニ欠クベカラザル肥料ナルヲ以テ全市ノ屎尿ヲ集メテ處分スル事ハ農業政策上面白キ事ニアラズ、從來通り農家ニ取扱ハシメ過剰量ヲ處分スルヲ以テ目下ノ過渡時代ニ處スル最良ノ方法トス

汲取區域ノ整理

東京市ハ先ヅ内務省ニ出願シテ屎尿市營ノ認可ヲ受ケサルベカラズ、屎尿ヲ市營スルニ付キ常ニ内ニアリテハ家主又ハ地主ノ反對アリ

外ニアリテハ農家ノ反對アリト云モ下肥對スル地主、家主ノ收入著
シク減少シ反對ニ借家人ノ大多數ハ汲取費ヲ支拂フニ至リタル今日
地主、家主等ノ反對ハ市營ヲ遲延セシムノ理由アルベカラズ又停滯
ノ原因ハ農家ノ怠慢ヨリ来リシモノニ非ズ市人口増加ニ起因スルモ
ナルヲ以テ農家又ハ下肥商人ニ適當ト認ム區域ヲ与ヘ残リノ過剩
區域ヲ加工處分ニ附セントスル市ノ行為ニ對シ農家ノ反對アルベキ筈ナ
キナリ。農家ノ恐れ、所ハ屎尿市營實施后ニ下肥ノ價格騰
貴スベト云フニアリ、然レドモ之ハ理由ナキ恐怖ナリ。又今日彼等ガ
購入スル價格ヨリモ著シク騰貴スルモノニ非ズ。今假ニ市營ガ實
施セラレテ市民成人一人一年分ノ屎尿代金ヲ四十錢ト定メテ之
ヲ農家及下肥商人ヨリ徴收スルモノトセヨ。成人一人一年ノ排出量ハ
二石五斗ニレテ此ノ汲取搬出費ヲ一円六十錢トセバ一石ノ價格ハ八十錢

ニ当レリ。而テ屎尿一石中ニ含有スル磷酸、加里及有機物ノ價格
ヲ三十錢トセバ残り五十錢ハ窒素二百五十匁ノ價ニレテ其百匁ハ二
十錢ナレバ比類ナキ安價ナル肥料タル事明白ナリ

東京市人口ヲ二百三十六萬人トシ大小人平均一日ノ排泄量ヲ五合トセ
バ一日萬四千八百石ノ屎尿ヲ排出ス。其五分一ヲ過剰量トレテ加工處
分ニ附スルモノトセバ日々二千三百六十石ノ屎尿ヲ處分セバ足レリトス。
而テ農家及下肥商人ニ交附スベキ人口ハ百八十八萬八千人ニレテ之ヲ成人
ニ換算シ百三十二萬四千六百人ト做シ一人當リ一年四十錢ヲ徴收セバ
五十二萬八千六百四十圓ヲ得ベシ。内十萬圓ヲ監督費トレテ支出シ二十
五萬八千四百二十圓ヲ加工屎尿ノ汲取費トレテ支出スルモ十七萬二百二十四
圓ノ餘剰益金ヲ得ベシ。次ニ市人口ノ三分一ニ相當スル排泄量ヲ加工
處分ニ附スルモノトセバ日々加工石數ハ三千九百三十五ナリ。而テ農家ト

下肥商ニ交附スベキ人口ハ百五十七萬三千人ニシテ之ヲ成人ニ換算シ
百十萬千百人ト做シ一人當リ一年四錢ヲ徴収セバ四十四萬四千四百錢
ベシ然ルニ此場合ハ加エスベキ尿尿ノ汲取費トシテ四十三萬八千八百十二圓五十錢
ヲ補足セザルベカラズ監督十萬圓ニ般會計ヨリ支出セザルベカラズ
大正文明ノ今日尿尿ヲ有利ニ處分セント欲スルハ卑劣ノ行為ナルガ如クニ
古ク者アリト尾モ之等ハ凡テ皮相論者ナリ市ノ政ニシテ財政ヨリ重キモ
ノハ他ニアルベカラズ加工場ノ骨子トシテ運用スル尿尿市營ヨリ生ズル利
益ハ必然ノ結果タルナリ尿尿ハ無償ニテ交附スル事ニ依テ容易
ニ処理セラルベキモノニ非ズ市ノ周圍郡部ノ農地ニ必要以外ノ尿尿
ガ市内ニ停滯スル間ハ多額ノ汲取料ヲ支拂フモ衛生ノ實ヲ擧ゲ
ル事ハ誰カルベシ又過剰量加エタル場合ニ於テモ尿尿ヲ一定價格
ニ農家ニ交附スルニ非ザレバ完全ナル汲取ヲ勵行セシム能ハサルベシ

尿尿ノ市營ヲ實行スル準備トシテ又市營實施ヲ確實ナラシムル手
段トシテ全市ニ涉リ綿密ナル調査ヲ行ヒ完全ナル汲取區域整理案
ヲ作製スルノ必要アリ

之ヲ行フニ先ヅキニ現在ノ汲取収態ヲ詳細ニ調査シ帳簿中ニ汲取人ノ營
ノ營業狀態耕作反別及其受持家屋各戸ノ狀況ヲ記入シ排出量ヲ
算定シテ汲取人ノ能力ニ對スル比較ヲ求ムベシ又ニ汲取人ノ能力即チ
年ヲ通ジテ停滯ヲ引起ササル範圍ノ能力ヲ査定シ之ニ依テ新區
域ヲ制定シ過剰區域ヲ全市ノ中心地帶又ハ各區ノ適當ナル所ニ殘
シ之ヲ加工區域トスルナリ汲取人ノ能力ハ農家アリテハ耕作反別ヲ
基準トシテ定ム例セバ一反歩ニ付キ市民成人十乃至十五人ヲ割當ルガ如
シ下肥商人ニ付リテハ常置汲取人夫數ヲ基準トシテ定ム例セバ人夫
一人ノ受持人口ヲ成人七百乃至九百人トスルガ如シ尿尿ノ排出量ハ市各

戸ノ人員ヲ年齢別ニ記入シ別ニ出入人員ヲ明記差引シテ算定ス。例セバ
七才以下ヲ数ニ加ヘズ十四才以下ヲ半人トシ出勤者及入勤者ヲ各半人トシ
之ニ排出係数ヲ乗ジテ算定ス。

以上ノ調査ハ一見至難事ナルガ如キモ既ニ前例モアリ完全ナル計畫ヲ
基礎トシテ着手セバ容易ニ実行シ得ベシ。農家ノ要求ヲ農會ノ手
ニ依テ一括シテ提供セシメントスルハ反テ矛盾ニ逢著スルノミシテ何算得
ル処ナカルベシ。之ハ市自ラ査定スルノ外ニ道ナキモノトス。斯ノ如クシテ加工
ノ数量モ自ラ判明シ一括シタル區域ヨリ汲取搬出スルモノナルガ故ニ費
用ノ算定ニ違算ヲ生ズル事ナク經濟上損失ヲ引起サザル程度ニ於テ
加テ成績ヲ算ズルヲ得ベシ。

屎尿ノ過剰量処分方法

都市ノ屎尿ヲ關係農地ニ交附シタル残りノ過剰ヲ処分スルニ凡ソ

三ツノ方法アリ。一海上ニ投棄スル事。二都市周囲ノ農村ニ關係ナ
キ遠方ノ農地ニ移出供給スル事。三化學的ノ處理ヲ行フ事ナリ。
東京渡ノ如キ深キ入海ハ屎尿投棄ニ便ナラザルハ何人モ容易ニ了
解スル処ナルベシ。之ヲ遠方ノ農地ニ供給スルハ良キ策ナリ。其實例モ
亦多シカラズ横須賀市ノ屎尿ヲ汽車積トシテ足柄郡方面ニ供給
シタル例。大阪市ノ屎尿ヲ高野鐵道沿線ニ供給シタル例。神戸
市ノ屎尿ヲ船積シテ四国及山陽沿岸ニ供給シタル例等ナリ。
都會ヨリ遠隔地ハ屎尿ノ價格高ク需要多シトモ之ヲ汽車積トシ
テ運搬スル場合ニハ三哩以内ヲ利益管内トスルヲ以テ消費ノ範圍狹ク
之ヲ計畫スルノ價值ナキガ如シ。利根川ノ流域ハ地理學者ノ說ニ從ハバ
一千哩ノ岸線ヲ有スト云フ。東京市ノ屎尿ヲ船積シテ此沿線ニ適
当ナル供給地ヲ見出スヲ得ベシト尾モ間斷ナク排出スル一定量ノ屎

尿ヲ遲滞ナク消費セシムル事ハ容易ノ業ニ非ズ且ツ又コレヲ
病ノ如キ疫病發生ノ際ハ拒絕サル、等ノ不便アルヲ以テ過剰ハ之ヲ化
學的加エ処分ニ附スルヲ以テ最モ妥善ニシテ經濟的ナル良策トス
化學処理中乾糞肥料製造ハパリ市ニ倣フベシ尾モ其内容ヲ講
究セバ設備ノ廣大ナルト經常膨大ナルトニ驚ラ嘆スルノミテ何
等得ル所ナカルベシ、燐炭肥料モ亦大量ノ屎尿ヲ消化スル良法ニ
アラズ加フルニ乾糞、燐炭肥料等ハ需要ノ範圍狹ク且ツ現金取引ヲ
行フ能ハザル欠点アリ、硫酸アンモニア、ニリテハ世界的製品ニシテ汚
物化製ノ產出ニ依テ市價ノ變動ヲ起スガ如キ憂ヒナシ其製造行
程ハ蒸餾操作ナルヲ以テ一面ヨリ見ル時ハ最モ入念ノ蒸氣消毒ヲ衛
生ノ見地ヨリ他ノ方法ニ比シ遙ニ安全ナル方法ト云フベシ

硫酸アンモニア化製方法

屎尿ヲ蒸餾シテ硫酸アンモニアヲ製造スル方法ノ技術上ノ至難点ハ尤
最初ノ行程ニ於テ製品ノ結晶ヲ得事、又ニ蒸餾用石炭ノ節約ヲ行
フ事、又三悪臭瓦斯ヲ發散セシメザル事ナリ

結晶生成ニ付キ難渋ナルハ屎尿ノ含窒素量ノ稀薄ナルガ爲メナリ、精巧
ナリト欲スル蒸餾機モ屎尿ヲ取扱フニ適ズ、余ハ明治四十年以來自
ラ之ニ從事シ大ナル苦痛ヲ犠牲トシ拂ヒテ今日ノ成績ヲ見ルに至レリ、蒸
餾機ノ形式ハ現在、横置斷續式ヨリ直立連續式ニ進ムヲ得バ完成
シタルモノト云フベシ、石炭ノ消費量ニ關シテハ東京大阪函館京城
大連等ニ行ヒタル屎尿加工場ニ於テハ屎尿一石當リノ石炭消費量
ハ三十斤以下タラシムル能ハザリシが大正五年ニ建設シタル名古屋市立加工
場ニ於テハ熱ノ回收ヲ完全ニ行ヒタル結果一石當リ十一斤九分ノ新レコード
ヲ得タリ、工場ヨリ排出スル惡臭瓦斯ニ付キテハ名古屋ノ加工場ハ

公開的成績ヲ示セリ、名古屋市ハ愛知硫酸安會社ヲシテ屎尿加エノ任ニ當ラシメタルモ當時未ダ臭氣ニ關スル研究幼稚ナリシ爲メ臭氣問題ヲ惹起シ大正三年中解散スルノ非運ニ遭遇シ市ハ自ラ加工場ヲ建設スル事ヲ決シ町井式ヲ採用シテ市民對農民ノ屎尿紛擾ヲ一掃シ豫期ノ通り年ナニ萬圓屎尿代金ヲ尾滞ナク徴収スルヲ得ルニ至レリ

硫酸アンモニア製法ノ生産費

屎尿ヲ大規模ニ取扱フ場合ニ其含窒素量ハ十分ノ四ヨリ五ノ間ヲ往来セリ但シ水ノ混入スル事ハ充分ニ取締リタル場合ヲ去テ、十分ノ四ノ時ハ屎尿一石ヨリ硫酸アンモニア九百匁ヲ生産シ十分ノ五ノ時ハ一貫二百匁ヲ生産ス、從來ノ経験ヨリ一石ヨリ一貫自ラ生産スル事ヲ了知ス、左ニ名古屋市立加工場ニ於ケル作業表ヲ示ス

作業日報 大正八年六月

日次	蒸餾數	屎尿消費	比重	職工數	石炭使用量	硫酸使用量	硫酸結晶生産量	硫酸液生産量
二六	三	一一〇	二八	一一	二七一	一一二・五二	八四・〇	四五・六
二七	三	一一一	三〇	一一	二七一	一二三・七四	八九・三	四六・二
二八	三	一一一	二八	一一	二七一	一二三・三九	八五・八	四九・二
二九	三	一一一	二八	一一	二七一	一二八・八四	八六・三	四五・二
三〇	三	一一一	二七	一一	二八一	一二二・九	九九・一	三三・三
合計		五五四			一三四	五八〇・五八	四四四・五	二一九・四
屎尿 一石付キ					二四匁	一四六	結晶計五五四二	屎尿一石付キ約一貫、割

名古屋市立加工場ハ晝夜三千石ノ屎尿ヲ加エスルヲ得ルモノナルモ郡部農民トノ間ニ協定破レル際ニ非ザレバ全作業ヲ行ハサル事トナリ居リ平時ハ休場スルカ又ハ調節ノ爲メ隨時過剰量ヲ處理ス

故石炭ノ消費量并キ大正五年一月竣立試運轉時ニ於ケル作業ヲ示ス

作業日報 大正五年一月

日次	蒸餾石数	石炭消費量	屎尿一石当リ石炭消費量
二二	一六〇石	三七〇〇斤	二三・〇
二四	二五六	六七〇〇	二六・二
二五	三二〇	九八〇〇	一七・五
二六	二四〇		
二七	七二〇	一六五〇〇	二二・九
二八	九六七	一〇五〇〇	一〇・九

石ノ屎尿ヨリ一貫目ノ硫酸アンモニアヲ生産スルヲ以テ一噸ノ硫酸アンモニアヲ生産スルニハ二百七十石ノ屎尿ヲ要ス。然レドモ市街ヨリ汲取

リテ工場ノ蒸餾釜ニ注入スル迄ニハ一割位ノ目減ヲ見込ム必要アル故三百石トナスヲ妥善トス。汲取搬出費ハ少クモ一石五十銭ヲ要スベク三百ヲ汲取ルニ百五十円ヲ要ス。屎尿ノ過剰量ハ之ヲ汲取リテ投棄スル代リニ加エスルモノナルヲ以テ汲取費ニ加エ生産費ト見ルベキモノ非ズ塵芥ト同様市ノ衛生費トシテ支拂フベキモノナリ。左ニ加エ開スル生産費ヲ計上ス

市街川岸ヨリ工場ニ至ル屎尿船運

一石ニ付 三百石

九・四

石炭 硫酸一噸ヲ製造スルニ要スル量

一万斤 四百斤

六・〇

酸(硫酸比量五十度)

一貫目 三百貫

三・〇

職工費

〃

一・〇

工場消耗品、防臭藥品其他雜費

一一・

合計金百二十四也

硫酸アンモニアノ市價が二百四噸ノ場合ニ生産費ニ比シ八十圓ノ利差アルヲ以テ汲取費ノ一部ヲ支拂フヲ得ベシ

屎尿加工場建設費

名古屋市ノ屎尿加工場ハ晝夜ノ加工能力一千石ニテ大正三年中建築諸材料ノ低廉ナル際購入シタルヲ以テ僅ク十二萬ニテ竣工ヲ見ルに至リ。大正九年中余ハ神戸市ノ囑託ヲ受ケ加工能力一千二百石ノ工場ヲ設計シタルニ約四十五萬圓ヲ計上セリ。東京市ノ五分ノ區域ヨリ排出スル屎尿ヲ加エス工場ヲ建設スルハ約一百萬圓ヲ要スベシ

結論

東京市ハ汚物處理ノ計畫ニ着手スルニ當リ先ツ塵芥ノ処分ニ始メシカル後屎尿ノ処分ニ及ボスベシ。市ハ塵芥陸上運搬ノ市營ヲ延長シテ進デ海上運搬ヲ營ミ過去三百年來ノ沿革ヲ尊重シテ千葉縣下ニ於ケル肥料芥消費ノ事實ニ基キ津田沼町ノ海辺ニ分別工場ヲ設立シ塵芥ノ全價值ヲ發揮セシムルト同時ニ千葉縣下農業ノ興進ヲ確保スベキナリ。

屎尿ノ処分ニ付キテハ從來ノ汲取人ヲ尊重シテノ永久的ナラシムル為メニ全市ニ涉リ汲取區域ノ整理ヲ行ヒ屎尿ノ過剩量ヲ明ニシ塵芥工場ト同一場所ニテ化學的加エ処分ヲ遂行スベキナリ。

汚物處理開始ノ後ハ汲取ノ機械的方法ニ付キ講究シ之ガ

